

令和5年度「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」 における北鶴橋小学校の結果の分析と今後の取組について

スポーツ庁による「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」について、令和5年4月から令和5年7月末までの期間に、5年生を対象として、「実技に関する調査」と「質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、体力等の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科も含め、総合的に子どもの体力向上をめざしています。

1 調査の目的（全国体力・運動能力、運動習慣等調査に関する実施要領より抜粋）

（１）子供の体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子供の体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

（２）各教育委員会、各国公私立学校が全国的な状況との関係において自らの子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子供の体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

（３）各国公私立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

2 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第5学年、義務教育学校前期課程第5学年、特別支援学校小学部第5学年の原則として全児童
- ・北鶴橋小学校では、5年生 23名

3 調査内容

- ・児童に対する調査
- ア 実技に関する調査（以下「実技調査」という。測定方法等は新体力テストと同様）
 - 小学校調査では、以下の種目を実施する。
 - 〔8種目〕 握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走、立ち幅とび、ソフトボール投げ

イ 質問紙調査

運動習慣、生活習慣等に関する質問紙調査（以下「児童質問紙調査」という。）を実施する。

令和5年度「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」結果検証

学校の概要

北鶴橋小	学校	児童数	23
------	----	-----	----

平均値

5年生	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20m シャトルラン	50m走	立ち幅とび	ソフトボール 投げ	体力合計点
男子	16.92	20.33	34.00	34.92	32.50	9.47	142.08	16.58	48.75
大阪市	15.97	18.72	32.66	38.27	45.10	9.50	147.92	20.35	51.13
全国	16.13	19.00	33.98	40.60	46.92	9.48	151.13	20.52	52.59
女子	16.73	18.82	40.91	34.55	24.18	10.27	132.73	9.82	49.73
大阪市	15.88	17.85	37.44	36.49	34.75	9.74	140.20	12.69	52.67
全国	16.01	18.05	38.45	38.73	36.80	9.71	144.29	13.22	54.28

結果の概要

今回の調査の結果では、大阪市の平均を男子が4種目、女子が3種目上回った。特に握力、上体起こし、長座体前屈は男女ともに大阪市平均を大きく上回る結果となっている。しかし、反復横とび、20mシャトルラン、ソフトボール投げは、男女とも大阪市平均との差が大きく、結果として体力合計点は、大阪市平均を上回ることができなかった。一方で、「運動やスポーツをすることは好きですか」の質問では、男女とも肯定的な回答をする児童が90%を超えている。また、「体育の授業は楽しい」の質問で、肯定的に回答する児童も、男女ともに90%を超えており、いずれの項目も大阪市平均を上回っている。しかし、1週間の総運動時間は、大阪市の平均より下回っていることがわかった。

これまでの取組の成果と今後取り組むべき課題

- ・20分休憩の最後の5分間で、1年を通して「なわとびタイム」を実施した。とべた回数や種目が増えていくことで、子どもたちの意欲が高まっていくとともに、20分休憩の開始時から運動場に出て、遊ぶ児童が増えてきた。
- ・3学期には「かけあしタイム」を実施し、寒い日でも1日に1度は外に出て、体を動かす習慣をつけるようにした。がんばりカードに走った距離を記録していくとともに、全校児童を2つのグループに分けて、グループの走った距離の合計を競い合うような取り組みを行ったので、意欲的に走ることができた。
- ・どの学年の児童も概ね運動をすることが楽しいと感じているが、遊ぶ時間や場所の制約もあり、十分に運動ができていない。また、これまで経験したことのない運動にチャレンジする機会も少ない。こうしたことから、ゲストティーチャーを招聘して、様々な運動を体験する機会を設けたり、地域や保護者と連携し、放課後や休日に運動に取り組むことができるようにしたりしていく必要がある。